

内と外との関ぎ合い

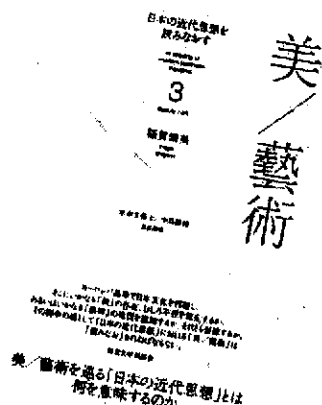
「今日の視点から近代日本の思想遺産を読み直」すという目的の資料選集シリーズの「藝術」篇

岡本佳子

末木文美士・中島隆博 責任編集
稲賀繁美 著

日本の近代思想を読みなおす3 美／藝術

3・7刊 四六判444頁 本体5400円
東京大学出版会



この国では幕末・明治期から、多くの西洋の概念が漢字の翻訳語を通じて導入されてきた。現在当たり前のようになっている「哲学」や「宗教」、そして本書の主題である「藝術」「美術」という概念もそれに該当する。輸入されて日の浅い外来の枠組みに準じて既存の思想、学問、生活慣習、技法、価値観、モノ等が再編成されたことは、日本の近代化の顕著な側面である。

「美術」という領域は、書画、彫物、細工、調度をはじめとする旧来の技法・産業を、明治期の博覧会事業や輸出振興に合わせ、「絵画」「彫刻」「美術工芸」といった範疇に割り当てられて生み出された。「藝術」

は「美術」との分類内容の重なりを経て現在の用法に至る。行政主導の「美術」創出においては、欧米諸国の反応や国威発揚、経済的国際競争が意識され、何を国家的奨励の対象とするかという政治的判断がはたらいていた。こうした経緯は、北澤寛昭、佐藤道信らが筆頭に二十世紀終盤以降の美術史学で明らかにされている。

本書は、「今日の視点から近代日本の思想遺産を読み直」すという目的の資料選集シリーズの「藝術」篇である。この巻は、西洋近代が生んだ「美」「藝術」の概念を、時代と地域を問わず適用可能な普遍的枠組みとして不問に付す態度が、もはや無効であることを説いて幕を開ける。これは、前述のような学問成果を含めた「近代」の問い直しが始まって久しい状況からすれば不可避の認識であると見える。さらに、グロー

バルな商業・情報環境の影響や、表現活動の多様化、急展開する大衆文化のなかで、「藝術」という近代の枠組み自体が機能しなくなっている状況を俯瞰する総論は胸を衝かれる。

もう一方は、西欧中心の「普遍」の内と外の問題である。これは、近代日本人が外在的な「美」の基準への適否を念頭に置きながら自文化を省察していた構造的な厳しさの意味する。日本の美意識を輪郭づける際にも、西洋標準に照らした「偏差」や「欠如」に日本の独自性を認めていた知識人たちの傾向を、編著者は指摘する。

また、明治日本の「美術」の制度化に携わり、美術雑誌を通じて、右の二つの意味の「内と外との関ぎ合い」は不可分に絡まり合っている。例えは、一九〇〇年パリ万博に向けてフランス語訳された明治の官製美術史「日本美術史」序文は、日本の文化遺産が西洋的な意味の「美術」としての価値を持つと同時に、「東洋美術の粹」を表現することを承認させようという欲求を露わにする。「彫刻家」としての強い自尊心を持つ高村光太郎は、セザンヌの自我の表現を深く理解する一方で、幕末生まれの木彫師の父光實が感服した、人間そっくりの「生人形」を作る職人の技を「実物模倣」にすぎないと退け、「美術」をめぐる世代間ギャップを見せる。マリー・ストウプス、ブルノ・タウトの感性の細やかさは、「外からの視線」も一枚枚ではないことを再認識させる。

その六十余年後、高度経済成長末期に岡本太郎の心を打った「虚」の空間は、久高島御嶽(うたぎ)のような石ころだけの「聖域」であった。そこには、西洋近代的知性からは度外視される始原的・呪術的エネルギーが潜在する。カナタ北極圏の地に石を積み立てられたアヌクシユクも、太郎を強烈に魅了した。保存を目的とせず、やがて崩れゆくその人型の造形は博物館のコレクションとは対極をなし、「近代」や「藝術」の規範とは端から折り合わない。

矢代幸雄「夢の感覚」(一九四〇)では、日本の水墨画の夢の表現に、「水と絵具」の「人為を越えたる有機的結合」が見出される。矢代は、墨汁や絵具の流れが作る文様を利用した紙張の装飾法と、類縁性をそこに発見し、近代的自我の手が及ばない偶然性の効果を眺め取っていた。矢代と同時代の柳宗悦は、英素茶室を美的愉悦の「聖域」として対置した。何もない「虚」こそが万物を受け容れ、その運動を可能にするという老子の思想によって、空っぽの茶室や東洋画の画面上に残された空白の有意義性を、岡倉は英語圏の読者に語った。

以上のような多彩な資料を精選し、この分野を担った人々の体験と思索、問題の突相に迫った洞察を、編著者は次の言葉に象徴させているとされる。「近代」において「日本」の「美」や「藝術」を問う試みは、「非近代」「日本」の「外部」「美の境界」「藝術の境」との相関のなかにしか結実するまい」と。

(国際基督教大学アジア文化研究所研究員)